

進路全般に使える パーソナリティ検査

東京都立晴海総合高等学校 キャリアカウンセラー 千葉吉裕 氏に聞く
(全国高等学校進路指導協議会事務局長)

ホランド理論はパーソナリティ測定に有用な、優れた理論です。ホランド理論に基づいた、きちんとした興味検査といえば、やはりVRTということになります。

VRTはパーソナリティ・テストです。RIASECの上位2つの興味領域の強さ、関係を見れば、だいたい本人の性格がわかりますし、教師にとっては非常に面白い分析が可能なツールですね。(「ホランド占い」参照：本誌08年秋季号より)

中高生は「自分とは何か」という意識を常に抱えているものですが、その問題に込めるものだといえますから、生徒は喜んでVRTを受けます。当たる／はずれる、という感覚で面白がつている。生徒全体に話をした後、希望者には個別にカウンセリングしますという、大勢の生徒がやって来ます。パーソナリティをいい当てる生徒は感嘆しますね。このツールで生徒とのラポール形成ができ、教師への信頼度も高まるのです。

個別にカウンセリングを行う際は、プロフィールだけではなく回答用紙を見て、どの質問項目にどう答えているかということに戻ってみることも有効です。

本校では5月に1年生全員に実施します。高校1年生のこの時期は生徒自身の意識も深まり変化していく頃なので、半年後の秋に別の方法で確認すると、分化が見られてきます。何にでも

興味をもっていた段階から、「これが好き、それは嫌い」というように、生徒の変化・成長によつて職業が絞り込まれてくるわけです。

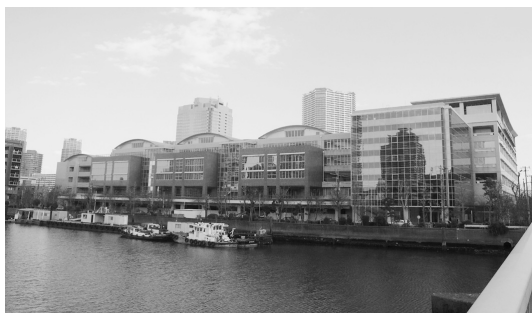
「職業」レディネス・テストという名称なので職業を決めるためにしか使えないと思うかもしれませんが、もちろん進学にも使えるものです。学科とパーソナリティの関係、職業と学校との関連を先生が理解していれば、もっと活用されると思います。

例えば、E(企業的)が高ければ経営学部とか、C(慣習的)は商業系、簿記、ビジネス系の専門学校とか。また、I(研究的)が低い場合は、大学の「学問然」とした教育だと本人は面白さを感じないかもしれないので、もっと実践型の教育機関を勧めたりします。

進学先、学部の選択のためにも有効ですので、職業を選ぶためのもの、就職希望者専用といった誤解はちよつと残念ですね。パーソナリティ測定、自己理解ができるツールだということです。

いわゆる「進路希望」といつて答えさせると、後でまったく変わってしまうこともありますが、こういう「興味・関心」で選択させると、さほどブレがなく、進路選択のミスマッチが減ると思います。

VRTは、自己理解に使



東京都立晴海総合高等学校
所在地●東京都中央区晴海1-2-1
生徒数●717名(2011年7月現在)

1996年、都で初の総合学科として開校。幅広い選択科目を設け、普通教育と専門教育を総合的に行う。科目の系列は、情報システム、国際ビジネス、語学コミュニケーション、芸術・文化、自然科学、社会・経済。教育目標は、①自立心や主体性を培い、自己責任能力を育てる②感性を磨き、創造力・思考力・表現力を育てる③コミュニケーション能力を高め、共に生きる姿勢を育てる。



えますし、総合学科の場合は科目選択に使えるし、進学する学科を考えるためにも非常に有効です。本校では10年以上活用し続けています。「これは面白いツールである」という先生の理解が進めば、より幅広く普及するのではないのでしょうか。

ホランド占い (職業研究2008秋季号 p24より抄録)

千葉吉裕

(～前略) 私が生徒から信頼を得るために見つけた方法が、「あなたのことをあなた以上に理解している」と感じさせる占い師の手法です。といって、疑似科学的なマジックの手法ではなく、正真正銘の理論に基づいた方法です。ここでは、その手法の一端を紹介させていただきます。

活用するツールは、職業レディネス・テスト。この検査は、「ホランドの職業選択理論」に基づいて作成されています。職業が冠に付いているので、職業選択のみに活用するツールと思っている人がいますが、それは大間違い。進学指導から、友人との人間関係まで診断できてしまうという優れたものです。被験者には記入済みの「回答用紙」と「結果の見方・生かし方」を持参させます。「結果の見方・生かし方」のプロフィールを見て、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的のいずれが高いか見ます。その際、回答用紙を見て、高い項目に「○」がたくさんついているのを確認します。「一」がついて高くなっている場合は、言い方を少し和らげ断定的にならないように注意します。

最初の言葉かけは、生徒に大きく響くので、たいへん重要です。企業的が高い場合「負けず嫌いでしょ」、社会的なら「寂しがり屋でしょ」、芸術的なら「友達との会話の言葉で、話を変えてしまうことはない?」、慣習的なら「ノートはきれいに書こうと心がけていない?」、現実的なら「時々一人になりたい時があるでしょ」、研究的なら「ちゃんと筋を通して説明してと思う時はない?」などと声をかけるわけです。さらに細かくプロフィールを読み解き、性格や行動パターン、興味と診断し、興味をもちそうな情報を提供していきます。誌面の都合で細かくお伝えできないのが残念ですが、職業レディネス・テスト(第3版)の手引が参考になります。ただし、占い師の手法は掲載されていませんので、悪しからず。

この手法を伝授した方々からは「本当によく当たります」というお褒めの言葉をいただき、生徒たちからは、「街角の占い師として食べていけますよ」とお墨付きまでいただけてしまいました。

卒業後の進路や履修科目などの選択決定は、高等学校に課せられた重要な使命です。この選択決定の際、世の中のことにについてあまり知らず経験も少ない高校生から希望を聞き、その申し出に沿うだけの選択決定では成功しません。教師が選択決定のための理論を理解し活用することは、相談活動の中で欠かせない知識と能力です。そして、それらを活用し信頼を得た教師の言葉は、子どもたちを大きく成長させていくと考えられます。多くの人にこの手法を活用していただければ、多くの高校生の悩みは解消することになるでしょう。(後略～)

VRT ● Tips

ジョン・L・ホランド John L. Holland, 1919 – 2008

今日、若者の職業支援に携わるカウンセラーをはじめ、進路指導や職業指導に関わりをもつ人々にとって、ホランド理論は身近な存在だ。職業レディネス・テストで使われている6つの職業領域もホランド理論に基づいている。

人のパーソナリティタイプがわかれば、自ずからその人の興味を生かせそうな職業領域や職業例の情報を得ることができるという、現在では広く知られる理論を確立したアメリカのカウンセリング心理学者、ジョン・L・ホランド。世界にその名を知らしめることになる「VPI職業興味検査」を開発するに至る背景を探ってみよう。

現在、わが国の大学生をはじめとする若者の進路指導や就職ガイダンスの用具としても広く活用されているVPIの原版は、1953年の初版から改訂が重ねられた1978年版を原版としている。

ウェスタンリザーブ大学で心理学を教えながら、職業カウンセラーを3年程勤めていたホランドは、「職業興味とパーソナリティとが非常に関連深い」ことに気づく。そして、さまざまな職業選択理論の中でも、職業選択および職業発達の主要な影響要因として特にパーソナリティタイプに着目する。人と環境の交互作用を強調する彼は、職業の選択がパーソナリティの表現でもあり、ある職業環境にいる人々には、共通したパーソナリティとパーソナリティ形成史を示しやすいと考えた。

この仮説に至る背景として、ホランド自身の職業経歴が伏線のように見てとれて興味深い。第二次世界大戦時、軍隊での入隊時の面接官の職に就いていたホランドが着目したのが、「一人ひとりの職業経歴には多くの規則性がある」ということだった。そこからホランドは、「その規則性は数個のタイプに分類できるであろう」という大胆な仮説を立てる。それが、ホランドのパーソナリティタイプ(6類型)となる。

この仮説は、後にメリーランド州の復興兵病院の職業カウンセラーとしての職務経歴の中で、さらに強固なものとなっていく。カウンセラーとして「もっと使いやすい検査を開発したかった」ホランドは、1953年、ついに「VPI職業興味検査」の初版を公表する。1957年から63年にはNMS社の調査研究部でリサーチャーを、1963年から69年まではACT社(アメリカのテスト開発の公益企業)でテスト開発の研究者を務める。

その後、ジョンズ・ホプキンス大学で教鞭をとりながら、59年に職業選択と適応に関する理論を初めて発表して以来の目標でもあった「実践する人々の役に立つ理論」の完成を目指して、さらに研究は続けられた。そして、科学的批判にも耐えうるものを構築しようというホランドの研究目標は、やがて「職業選択の理論」(Making Vocational Choices)として結実する。

実践ツールとしての「最も使いやすい検査開発」と「実践する人々の役に立つ理論構築」に一生を捧げたホランドは、「VPI職業興味検査」とともにその名を今日に残しているが、そこから垣間見えるホランド像には、IタイプとEタイプを併せもつパーソナリティが感じられてならない。